

卒業論文の要旨

論文題目	日本における五節句の年中行事― 植物との関係性からの比較考察 ―
氏名	吉村唯菜
メジャー	社会学
<p>(要旨)</p> <p>日本の年中行事では、正月には門松を、ひな祭りには桃の花を飾り、また夏越の祓では茅をくぐるなど、特定の植物が関わることが多い。本論文ではその点に関心を持ち、年中行事でも特に五節句に焦点をあて、その背景や意味や機能について調査研究を行った。</p> <p>日本の年中行事では、なぜ、特定の植物が関わりをもつのか、これについては先行研究が必ずしも多くはないことから、植物が年中行事と関わるようになった歴史的背景やそれがもつ意味やまた果たしている役割について調査研究することを本論文の目的とし検討した。</p> <p>調査方法は、数ある日本の年中行事のなかでも、特に五節句に焦点を当てて考察することにした。五節句とは、1月7日の人日の節句、3月3日上巳の節句、5月5日の端午の節句、7月7日の七夕の節句、9月9日の重陽の節句の5つの節句を意味する。また議論を明確化するために、五節句に関わる植物の中でも、代表的な植物一つを取り上げ、一節句に一つずつの植物について分析考察とした(例外として人日の節句である春の七草は七つの植物について調査)。そのため、七草、桃、菖蒲、笹竹、菊という植物を取り上げ、各章で考察を行った。</p> <p>結果として、植物はそれぞれ、その季節と関わり、節句内で、人日の節句の七草粥や重陽の節句の菊酒などの食事や、端午の節句の菖蒲湯や七夕の節句の七夕飾りなどの儀礼との関りで使用・消費されることが多いことが明らかになった。また、五節句の文化は中国を起源としているが、中国からの伝播以前から植物と節句が結びついている上巳の節句の桃の事例なども明らかになった。植物は薬効や魔除けなどの効果があるものが多く、かつてはその効果を信じて儀礼が行われていたと考えられる。しかし、現代ではその深い意味や役割などが十分に理解・意識されずに、単に形式だけの継承や商業化による影響で行われているものも多いことが明らかになった。</p> <p>それぞれの五節句と植物の関係性の調査から、類似・共通する点として、「薬効と長寿」「魔除けの効果」「神性なる植物」の3点を挙げて分析考察した。植物には薬効や長寿の効果があるとされていたために、その薬効が同時に魔除けや厄払いの役割も担っているとされ、さらにそこから死とは無縁である神の存在と関わる神秘性が植物に宿るという「神聖なる植物」という考えが生じたものと考えられる。したがって、この3点はそれぞれ関連性をもつものと考えられる。</p> <p>結論として、五節句と関わりを持つ植物は、単に季節的に旬であったという理由だけで行事と関連しているわけではない。それぞれの植物には、特別な薬効や魔除けなどの力の効果があると信じられ、人々の生活の中で重要な意味や役割をもつことが明らかになった。ただし現在では、五節句における植物、さらには五節句自体やその意味などが、人々に知られる機会が少なくなっており、単なる形式的継承や商業化との結びつきがより際立つようになっている。このような変化についての研究は今後の課題の一つである。そのような現代だからこそ、年中行事やそれらに関わる植物の意義を再考してみることは、生活を豊かにするヒントが含まれているように考えられる。年中行事と植物の関連を探ることで、先人たちが植物へ込めた願いや祈りが読み解けるのではないかと考えている。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>日本の年中行事に関しては、民俗学の研究でもあまたの先行研究の蓄積がみられるが、年中行事と特定の植物との関連性に注目して考察した研究はさほど多くはない。本論文は、日本の年中行事と植物との関連性に注目し、特に五節句と各節句と一つの主要植物に焦点を絞り、その歴史的背景や意味や役割について考察しており、章立てがよく整理され、論旨が明快な構成となっており、また身近な独自の資料も盛り込まれていることから、優秀論文として推薦する次第である。</p>	